宮崎大学教育学部紀要　教育科学　第74号（1993）　1－11頁

自閉性障害児の学校生活の調査

安東　末廣　　草野　勝彦

A Clinical Survey of the School Life of Children wiht Autistic Disorder

Suehiro ANDO　and　Katsuhiko KUSANO

はじめに

養護学校が義務化になり10年が経過し，障害児の学校教育は大きく発展し，その教育内容が充実するとともに教育方法の開発も積極的になされてきたことは周知の事実であるが，それと同時にさまざまな問題点もわかってきた。とりわけ，自閉性障害児の学校教育には多くの問題点が存在している。最大の問題は，その指導のしにくさにある。養護学校の現状を見ると，自閉性障害児は精神遅滞児といっしょに教育を受けているが，精神遅滞児とくらべると状況認知に障害や混乱があるために学校の校時や教室の授業環境についていけずに孤立的行動や固執的行動をとりやすい。また，対人関係能力が低い上に言語理解が乏しいために，教師側の教育的働きかけが伝わりにくいことなどが指導のしにくさとして映っている。このため，教師側が子どもの状態像に応じた働きかけをしないと，自閉性障害児は不適切で混乱した行動をとりやすい。つまり，教師側がいかにして個々の子どもの状態像を把握し，教育的対応をするかが教育を充実させる上で重要な条件となっている。

障害児教育の今日的な状況として，障害児を持つ親は養護学校への就学を避けて，地域の普通学校の特殊学級に入学させる傾向にある。このため，地域の学校の特殊学級はこれまでのイメージが変遷しつつあり，障害の重度化，多様化は養護学校のみではなくなり，地域の学校の特殊学級でも見られるようになっている。このような状況の中にあって，自閉性障害児の教育もさまざまな問題をかかえており，早期発見と早期療育の必要性，教育環境の構造化，教育方法や教材・教具の開発など今後に残された課題は多い。

本研究ではこのような障害児教育の現状について，特に自閉性障害児の学校での実態調査に基づいた検討を加えて，教育的対応の参考となるいくつかの資料を提示してみたい。検討する内容は，小学校から中学校という加齢による状態像と発達状態の変化，学校での教科学習や運動面の実態，基本的生活習慣や遊びなどの行動面についての実態などである。

方　法

1）調査対象児の人数

県立の精神薄弱養護学校と公立小学校の特殊学級に在籍し，自閉症児として教育的処遇を受けている子どもで，人数は86名である。

2）調査方法

調査は学級担任に対してあらかじめ作成した調査用紙に基づき，一人の子どもについてインタビュー形式で行った。調査時間は一人の子どもにつき約45分から60分を要した。調査時期は1991年6月～10月であり，調査の時間帯は放課後や夏休み期間を利用した。

3）調査用紙

調査用紙は次のような構成とした。①自閉性障害の状態像，②教科学習や運動面，③学校での行動，④親への対応の4領域である。状態像については，ＤＳＭ－Ⅲ－Ｒの診断基準に示される16項目について，該当項目のチェックをおこなった。教科学習は，国語，算数，体育，図工，音楽，養訓などについて，学校の時間割などの違いに配慮しながら下位の質問項目を設けた。学校での行動については登下校，給食，掃除，衣服の着脱，排せつ，遊び，テレビなどについて下位の質問項目を設けた。親への対応では，親が教師にどのような訴えをするか，親に指導している内容などについて質問した。

結果と考察

1）養護学校に在籍するいわゆる自閉症児の実態

学校で自閉症児として教育的処遇を受けている子どもを調査の対象としたため，対象児の選択は学校側に依頼した。本研究では，ＤＳＭ－Ⅲ－Ｒの自閉性障害の診断基準をもちいたため，ここでは学校で自閉症児として扱われている子どもの人数を示した。

表1　養護学校に在籍する自閉症児

	小学部	中学部	高等部	計
男	22	21	4	47
女	5	5	1	11
計	27	26	5	58

自閉症児の進学できる高等部は1校にのみ設置されているために，在籍する生徒の人数が少なく，高等部全体の生徒の4％にすぎない。高等部の教育課程は作業学習が中心となっているために，そのほとんどが作業学習が可能な精神遅滞児で占められていて，与えられた作業課題

に取り組むことが困難な自閉症児は，中学部から高等部への進学は難しい状況にあることを示している。男女比は４：１で，若林（1983）が示したこれまでのデータと一致していて，男児に多く出現していることがわかる。

２）特殊学級に在籍する自閉症児の実態

特殊学級では，公立小学校の情緒障害学級に在籍している子どもを対象とした。
対象児は18名（男児15，女児３）であり，男女比は括弧の中に記したが養護学校と同様の比率になっている。

実際には，特殊学級のない学校にも在籍しているが，その実態は把握することが不可能であった。また，中学校では自閉症児は特殊学級に在籍していることが多いのであるが，どの学校に在籍しているかを把握することは時間的制約のためできなかった。

３）ＤＳＭ－Ⅲ－Ｒの自閉性障害の診断基準を満たす生徒

表２　養護学校における自閉性障害児

	小学部	中学部	高等部	計
男	13(59%)	11(52%)	3(75%)	27(57%)
女	3(60%)	4(80%)	1(100%)	8(73%)
計	16(59%)	15(58%)	4(80%)	35(60%)

養護学校の小学部と中学部では，約60％の生徒がＤＳＭ－Ⅲ－Ｒの診断基準を満たしている。残りの約40％の生徒は診断基準に合致しないことになるが，このことについては診断基準のあり方とも関連するので議論は別の機会にしたい。ただ，印象として診断基準を満たさない群は満たす群に比べて，より軽度かより重度かいずれかの生徒であり，中等度の自閉性障害児が診断基準を満たす群と言えよう。そして，診断基準を満たさない群には軽度と重度の自閉性障害児が存在していることになり，調査結果では比較的重度の自閉性障害児が該当していることがわかった。

特殊学級の場合は，診断基準を満たす生徒は11名で約61％にあたり，養護学校とほぼ同様の出現率を示している。

4）対人，言語，活動・興味（診断基準の3領域）について

ここでは，診断基準を満たす群をⅠ群，満たさない群をⅡ群として考える。各領域ごとに診断基準に該当した項目数の平均値を算出し，小学部と中学部，特殊学級の平均値をそれぞれ算出した。

養護学校の小学部と中学部のⅠ群を比較すると，3領域とも，中学生ではいずれも減少の方向にある。つまり，年齢が高くなると対人関係，言語活動，活動内容・興味関心がいずれも改善され発達する傾向にあると言える。特に，言語についてはその傾向がきっきりと見られる（$t=2.447$，$p<0.05$）。

表3　対人，言語，活動・興味の変化

	養護学校・小学部			養護学校・中学部			特殊学級	
	Ⅰ群	Ⅱ群	全体	Ⅰ群	Ⅱ群	全体	Ⅰ群	Ⅱ群
対　　人	3.13	2.31	2.79	3.00	2.70	2.90	3.91	2.98
言　　語	4.38	3.46	3.97	3.53	3.60	3.55	4.64	4.02
活動・興味	3.31	1.62	2.55	2.89	1.70	2.48	2.45	2.08

養護学校の小学部と中学部のⅡ群については，Ⅰ群とは逆な結果になっている。つまり，中学生になるにつれて対人，言語，活動・興味の発達は低下する傾向にある。このことは，Ⅱ群には比較的重度の子どもが多く，Ⅰ群に比べて発達の予後がよくないことを示していると言える。

養護学校全体で見ると，対人関係は中学生になっても改善されないが，言語と活動・興味はⅠ群同様に中学生で改善が見られる傾向にある。

養護学校と特殊学級のⅠ群を比較すると，対人関係と言語は養護学校のほうが発達している傾向にあるが，活動・興味は逆に特殊学級の方が良好な数値を示している。

養護学校と特殊学級のⅡ群を比較すると，全項目とも養護学校のほうが低い数値を示している。特殊学級のⅡ群は養護学校のⅡ群より高い数値を示しているが，特殊学級のⅡ群はより軽度の子どもが比較的多く在籍している印象を受けた。

最近の就学状況として特殊学級に重度の子どもが入学する傾向にあるが，自閉性障害児についても当てはまり，重度の自閉性障害児も在籍していた。

5）会話上の問題

診断基準に示される会話上の問題に関する項目は，診断基準の言語的および非言語的内容の第4，5，6番目の項目であるが，表4ではこれらの項目にまったく該当しない場合を「会話を持たない子ども」とした。

養護学校のⅠ群では，中学生に比べると小学生の方が会話のない子どもが多く，中学生では減少する傾向にある。養護学校のⅡ群では，約半数の子どもに会話が見られず，Ⅰ群より多く，ことばの発達が遅れていることを示している。養護学校と特殊学級の小学生を比べると，Ⅰ群では差がないが，Ⅱ群では養護学校のほうが会話のない子どもが多く，養護学校に在籍する生徒に会話のない子どもが多い傾向を示している。

表4　会話上の実態

	養護学校・小学部		養護学校・中学部		特殊学級	
	Ⅰ群	Ⅱ群	Ⅰ群	Ⅱ群	Ⅰ群	Ⅱ群
会話を持たない子ども	37% (6／16)	54% (7／13)	25% (4／19)	50% (5／10)	36% (4／11)	42% (3／7)
会話上の問題を持つ子ども	87% (14／16)	69% (9／13)	42% (8／19)	60% (6／10)	63% (7／11)	57% (4／7)

表4の「会話上の問題を持つ子ども」は，診断基準の4，5，6番目の項目にすべて該当するか，まったく該当しないか，もしくはその両方が混じっている場合とした。

養護学校のⅠ群の小学生では，会話上の問題を持つ子どもがとくに多く，中学生になると半数に減少し，明らかに会話の上での発達が見られる（$\chi^2=7.666$, $p<0.01$）。Ⅱ群では60%以上の子どもが会話上の問題を持ち，中学生になっても変化が見られない。

養護学校と特殊学級の小学生を比較すると，特殊学級の方が会話上の問題を持つ子どもが少ない傾向にある。

6）教科学習（「読む」，「書く」，「計算する」）

自閉性障害児の教育では，とかく対人関係の障害や感情の障害が注目されがちである。しかし，教科学習の指導は基本的生活習慣の訓練とともに極めて重要なものである。ここでは，言語概念，数概念について実態を検討してみる。

表5の「ひらがなが読める」については，養護学校では小学生よりも中学生の方が，ひらがなが読める子どもが多い。特に，Ⅱ群の小学生ではひらがなの読める子どもが少ないが，中学生になると急激に増加し，半数の子どもが読めるようになっている。

小学生どうしを比較すると，特殊学級の方が読める子どもが多く，Ⅱ群ではその差がはっきり

している（$\chi^2=5.247$, $p<0.05$）。従来より，特殊学級は養護学校より能力的に高い子どもが就学しているが，自閉性障害児についても同様のことが言える。この傾向は，カタカナと漢字についても同様に見られている。

表5　言語概念と数概念

	養護学校・小学部		養護学校・中学部		特殊学級	
	Ⅰ群	Ⅱ群	Ⅰ群	Ⅱ群	Ⅰ群	Ⅱ群
ひらがなが読める	31% (5／16)	7% (1／13)	42% (8／19)	50% (5／10)	63% (7／11)	57% (4／7)
カタカナが読める	31% (5／16)	7% (1／13)	31% (6／19)	30% (3／10)	54% (6／11)	57% (4／7)
漢字が読める	18% (3／16)	7% (1／13)	21% (4／19)	30% (3／10)	36% (4／11)	57% (4／7)
ひらがなが書ける	31% (5／16)	7% (1／13)	47% (9／19)	40% (4／10)	66% (6／11)	71% (5／7)
カタカナが書ける	18% (3／16)	7% (1／13)	21% (4／19)	30% (3／10)	45% (5／11)	57% (4／7)
漢字が書ける	12% (2／16)	7% (1／13)	15% (3／19)	10% (1／10)	36% (4／11)	57% (4／7)
数　唱 (10まで)	50% (8／16)	23% (3／13)	42% (8／19)	40% (4／10)	63% (7／11)	57% (4／7)
加（減）算	18% (3／16)	7% (1／13)	15% (3／19)	10% (1／10)	54% (6／11)	57% (4／7)

「カタカナが読める」については，ひらがなと同様の傾向を示すが，全体的にひらがなよりも人数が少なくなり，カタカナの方が読みづらくなることを示している。養護学校のⅡ群と特殊学級のⅡ群では，その差がはっきりしている（$\chi^2=5.934$, $p<0.05$）。

「漢字が読める」については，養護学校と特殊学級のⅠ群では，漢字の読める子どもの人数がカタカナよりもさらに減少している。養護学校と特殊学級のⅡ群ではその差がはっきりしている（$\chi^2=5.934$, $p<0.05$）。

「読む」ことについてまとめると，ひらがな，カタカナ，漢字の順に難しくなっていることがわかった。また，養護学校より特殊学級に在籍する子どもの方がよく読めることがわかる。

次に，「ひらがなが書ける」については，養護学校ではひらがなの読みとほぼ同様の数字を示しているが，特殊学級のⅡ群ではひらがなを書くことのできる子どもが増加している（$\chi^2=6.028$, $p<0.01$）。

「カタカナが書ける」については，ひらがなが書けると同様の傾向を示すが，全体的にひらがなよりも人数が少なくなり，ひらがなよりもカタカナの方が書きずらいことを示している。養護学校と特殊学級のⅡ群では，その差がはっきりしている（$\chi^2=5.934$, $p<0.05$）。

「漢字がかける」についても，ひらがなやカタカナと同様の傾向を示し，特に養護学校と特殊学級のⅡ群では，その差がはっきりしている（$\chi^2=5.934$, $p<0.05$）。

以上の読む，書くについてまとめてみると，ひらがな，カタカナ，漢字の順で数値が低くなり，これらの順に難しくなることがわかる。自閉性障害児の持つ形態認知や意味認知の障害が反映されていると考えられる。養護学校と特殊学級を比較すると，読む，書くともに特殊学級の方がよくできる子どもが多く，特殊学級に在籍する子どもの方が言語概念が発達していると言える。

数概念は数唱（10まで）と加（減）算について調査したが，養護学校では数唱にくらべて加（減）算が難しくなっており，数概念の発達の難しさを示している。いっぽう，特殊学級では加（減）算の落込みは見られず，学力的に言語概念と同様に養護学校よりもよいという結果を示している。小林（1980）は，機械的な数唱，単純な数の操作は比較的容易に学習していくのに反し，数概念の習得には著しい困難を示すとしているが，本調査の結果もこの見解を裏付けている。

8）運動（走る，投げる，泳ぐ）

表6は，走，投，泳に関する結果をまとめたものである。「走る」はいわゆる走力そのものを測ったものではなく，伴走なしで目的の場所までまっすぐに走ることができるかどうかを評価したものである。この課題は一般の小学生においてはほとんど全員ができる内容であるが，今回の対象児においては30％以上の子どもができないという状態にあった。

「投げる」は相手にボールを投げるという課題であるが，これができるという子どもはさらに少なくなっている。投げる運動スキルの未熟さに加えて対人認知の不十分さが関係しているのであろうが，その点を明確にするにはさらなる研究が必要である。

「泳ぐ」はプールに入って遊ぶことができるということもふくめての数値である。一般に自閉性障害児は水遊びが好きであるといわれているが，それを反映した数値になっている。泳ぐことができるのは，ごく小数である。

以上の3項目に関しては，養護学校のⅠ群とⅡ群の間には顕著な差は見られなかった。特殊学級のⅡ群が他の群に比べてやや高い値になっていた。

表6　運動能力

	養護学校・小学部		養護学校・中学部		特殊学級	
	Ⅰ群	Ⅱ群	Ⅰ群	Ⅱ群	Ⅰ群	Ⅱ群
走　る	50％ (8／16)	61％ (8／13)	68％ (13／19)	66％ (6／9)	63％ (7／11)	71％ (5／7)
投げる	31％ (5／16)	46％ (6／13)	57％ (11／19)	44％ (4／9)	54％ (6／11)	85％ (6／7)
泳　ぐ	87％ (14／16)	92％ (12／13)	78％ (15／19)	100％ (9／9)	90％ (10／11)	100％ (7／7)

自閉性障害児の運動能力は一般の子どもとあまり変わらないという報告も一部見られるが，最近の定量的なテストを用いた研究は，自閉性障害児の運動能力は一般の子どもよりも低い水準にあることを明かにしている。Reid, Collier, and Morin (1983) は，自閉症児がボール投げやボールキャッチ，柔軟性のテストにおいて低い成績を示したと報告している。また，トレーニングの研究によると，自閉症児の場合その効果は一般の子どもよりも小さく現れるという。しかし，反復練習によって効果の幅を少しずつ広げることはできたという報告がなされている（Schover and Newson, 1976 ）。

9）学校での行動①

ここでは，基本的生活習慣に関する内容を扱っているが，自閉性障害児の教育にとつてはもっとも基本的なものである。

表7をみると，養護学校のⅠ群では中学生になると排せつが自立することを示している（χ^2=8.241, $p<0.01$)。特殊学級の小学生は自立している子どもが多く，養護学校と特殊学級のⅠ群を比べると，特殊学級の方が自立していると言える（χ^2=6.014, $p<0.05$)。これに対して，養護学校のⅡ群では期待と異なる数値になっており，小学生より中学生のほうが逆に自立している子どもが少なくなっている。その実態については，足に障害があって車椅子に乗っている，ズボンはなんとか下ろせる，付き添っていないと他の場所で排尿する，排尿は自立しているが排便は困難，などが報告されている。

中根（1985）によれば，排せつがうまく行かない原因として身体的要因もあり，胃腸を支配している自律神経や膀胱の知覚神経の未熟があげられており，排尿・排便の自立の遅れには精神遅滞をともなった子どもにその傾向が強いことが指摘されている。

表7　基本的生活習慣

	養護学校・小学部		養護学校・中学部		特殊学級	
	Ⅰ群	Ⅱ群	Ⅰ群	Ⅱ群	Ⅰ群	Ⅱ群
排せつ	25% (4／16)	76% (10／13)	73% (14／19)	50% (5／10)	72% (8／10)	85% (6／7)
衣服の着脱	68% (11／16)	61% (8／13)	78% (15／19)	40% (4／10)	72% (8／11)	71% (5／7)
掃除	25% (4／16)	30% (4／13)	42% (8／19)	20% (2／10)	9% (1／11)	42% (3／7)
偏食	56% (9／16)	69% (9／13)	43% (7／19)	50% (5／10)	18% (2／11)	14% (1／7)
テレビ	31% (5／16)	15% (2／13)	21% (4／19)	10% (1／10)	36% (4／11)	57% (4／7)
パニック	37% (6／16)	30% (4／13)	21% (4／19)	20% (2／10)	18% (2／11)	14% (1／7)

衣服の着脱については，一般的に自閉性障害児は身体の協応動作や手先の微細運動が不器用であるために，難しい課題となっている。養護学校のⅠ群と特殊学級では自立している子どもが多いが，養護学校のⅡ群の中学生で衣服の着脱の自立が落ち込んでいる。自立していない子どもの実態を見ると，登校後服を勝手に脱ぐので着せるのに手がかかる，前後表裏が不明で介助が必要，着脱の流れが理解できていない，などが報告されている。衣服の着脱が困難であることの原因として，手先の功緻性の未熟さと模倣の困難があげられる。

掃除は，掃く，しぼる，拭く，物を運ぶなどの異なったいくつもの行動が含まれる行為であるが，自閉性障害の子どもにとってはこれらの一つ一つの行動そのものが難しいものであり，これらの行動を目的に応じて使い分ける必要のある掃除を自発的にすることは難しくなる。運動面で見た行動とは異なって，自発的に掃除をする子ともは減少している。なかでも，特殊学級のⅠ群の子どもは養護学校のⅠ群の子どもと比べて掃除を自発的にする子どもが少ないのが特徴である。もし，同じグループの他の健常児が自分のペースで掃除をしてしまえば，自閉性障害児には掃除に対する自発的行動が形成されないことになることも，教師は考慮しておく必要がある。

自閉性障害児は幼児期より強い偏食を示す子どもが多くみられるが，養護学校の小学部全体では偏食が半数以上の子どもにみられ，中学生になると幾分改善する傾向にあるが，依然として多くの子どもに偏食が残っている。自閉性障害児の味知覚の過敏性が残っているものと考えられる。これに対して，特殊学級の小学生では偏食が極めて少なくなっており，養護学校と特殊学級のⅠ群では明かな差があり（$\chi^2=3.913$, $p<0.05$），Ⅱ群でも明かな差が見られている（$\chi^2=5.495$, $p<0.05$）。特殊学級では，味知覚に過敏性の低い子どもが在籍していたのか，偏食の改善が見られた子どもが多いのかは明確でない。

10）遊び

遊びという行動はその基本に他者や周囲のものに対する関心が必要となる。自閉性障害の病因論では脳の知覚中枢に問題の所在を見いだし，Rutter,M.(1971)は認知・言語障害説を，Hermelin,B.M.& O'Connor,N.(1970)らは知覚・認知障害説を主張している。このため，自閉性障害児は乳幼児期より周囲の人に対する関心が乏しく，他者とのコミュニケーションが発達しにくい状況にある。

表8　遊　び

	養護学校・小学部		養護学校・中学部		特殊学級	
	Ⅰ群	Ⅱ群	Ⅰ群	Ⅱ群	Ⅰ群	Ⅱ群
先　生	6% (1／16)	25% (2／13)	10% (2／19)	10% (1／10)	9% (1／11)	14% (1／7)
他　児	0% (0／16)	7% (1／13)	5% (1／19)	10% (1／10)	0% (0／11)	14% (1／7)
ルール	0% (0／16)	7% (1／13)	0% (0／19)	0% (0／10)	0% (0／11)	0% (1／7)

表８を見ると，先生との遊びについては養護学校，特殊学級ともに先生と遊びのできる子どもは極めて少なく，自閉性障害児の中核的症状である他者とのコミュニケーションの難しさを示すものである。ただ，教師側が子どもの興味や関心のある内容を見抜いて，子どもに合わせるかたちで遊ぶために，子どもがその遊びに乗って行けるという意味でこのような数字が出ていることも考慮する必要がある。

他児との遊びについては，相手が教師の場合とは異なり同年代の子どもとなると，遊びもさらに難しくなることが示されている。養護学校の場合は遊ぶ相手が障害児であり，特殊学級では障害児もしくは健常児であるが，いずれの場合でも自閉性障害児が他児と遊ぶことは難しいことがわかる。

次に，対人関係や遊びの基本であるルールの理解は，まったく困難であると言える。ただ一人だけルールの理解できている子どもが養護学校小学部にいるが，この子どもは診断基準に合致していないⅡ群に属しており，学校でも軽度の子どもとして処遇されている。他児との会話も簡単なものならできる状態で，好きなボール遊びではルールを理解して遊ぶことが可能である。

11）学校での行動②

テレビは子どもの状態に応じて見せているという答えが多い。自分の好きな番組ないしは教師が見せる番組を見るという子どもは，養護学校では少ない。特に，中学生では減少する傾向にある。小学生では，テレビを見るこどもは特殊学級の方が養護学校より多くなっている。

パニックは養護学校より特殊学級の方が少ない。パニックはもともと自閉性障害児が周囲の状況に適応することが困難で感情的に混乱状態になる特有の行動ととらえることができるが，特殊学級に在籍する子どもの方が自己の周囲への適応がよいことを示している。

以上のように本研究においては，自閉性障害児の学校生活の実態について調査し，まず在籍児童生徒の人数と内訳，ＤＳＭ－Ⅲ－Ｒの診断基準を満たす児童生徒の人数を示した。次に，発達的観点と学校種別に着目しながら，対人・言語・活動興味，会話，教科学習，運動，学校での行動（基本的生活習慣を中心とした），遊びなどについて実態を示しながら，その意味について検討を行った。

今回の分析は調査した内容のすべてについてではないが，いくつかの知見を得ることができた。それらの結果が自閉性障害児の学校教育に参考になることを期待したいが，一方でその結果をどのようにして実際の教育の内容や方法として生かしていくかが重要な課題である。また，今回の調査対象となった児童生徒が今後どのように発達していくのかを追跡調査することも，本調査結果を確認することになるし，自閉性障害児の学校教育がどのようにあらねばならないかを教えてくれると考える。

謝　辞

本研究の調査にあたっては，県下の精薄養護学校校長会（会長：原幸寛宮崎養護学校校長）の先生方，県特殊教育研究会会長鈴木典彰校長をはじめ，実際に調査をさせていただいた学校の校長先生，子ども達の担任の先生方には心よく協力を賜りましたことを，記して感謝申し上げます。

引用文献

1) Hermelin,B.M.& O'Conner,N. (1970) : Psychological experiments with autistic children. Oxford:Pergamon Press.
2) 小林重雄 (1980) : 自閉症 — その治療教育システム — 岩崎学術出版社.
3) 中根 晃 (1983) : 自閉症の臨床 岩崎学術出版社.
4) Reid,G.,Collier,D.&Morin,B.(1983) : The motor performance of autistic individuals. In R.L.Eason,T.L.Smith,&F.Caron(Eds.), Adapted physical activity:From theory to application(pp.201-218). Champain IL:Human Kinetics.
5) Rutter,M. (1971) : Infantile Autism. Edinburgh and London: Churchill Livingston.
6) Schover, L.R., and Newson,C.D.(1973) : Over-selectivity, developmental level and overtraining in autistic and normal children. *Journal of Abnormal Psychology*,4,289-298.
7) 若林慎一郎(1983) : 自閉症児の発達 岩崎学術出版社.

(1993年 2 月25日 受理)